

狩野宏明展
— 姫神様を知らないか —
作品コメント



「姫神様を知らないか」

80S (145.5×145.5cm)

アクリル絵の具 ミュースグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『山海評判記』のクライマックスシーンに着想を得て描いた。

『山海評判記』は、昭和初期の東京と能登を舞台に、北陸の霊峰・白山の信仰へと連なる怪異を描いた作品。

物語の主軸は、姫沼綾羽を首領として白山姫神を信仰する一党が、主人公の矢野とお李枝のまわりに出没し、数々の怪異によってお李枝を一党の後継者として引き取ろうとする話である。

クライマックスシーンでは、お李枝たちが山道で襲われて絶体絶命の危機に瀕しているまさにその時、姫神の使者が突如現れ、主人公を襲った集団に対して人知を超えた圧倒的な力を発揮して縦横無尽に打ち負かす。

作中随一の痛快な場面であるが、そのシーンの後はお李枝を連れ去ろうとする使者の不思議な唄が続き、読者の感情は宙吊りになったまま物語は幕を閉じる。

本展のタイトル作品である本作は、姫神にまつわる怪異を扱った『山海評判記』を手がかりに、現実と幻想の境界において、人間の理解を超えて作用する力を描いた。

ひめぬまあやは
「姫沼綾羽」

40S (100.0×100.0cm)
アクリル絵の具 ミュースグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『山海評判記』に登場する姫沼綾羽をモチーフとして描いた。

姫沼綾羽は、作中に登場する白山姫神信仰の一党の長である。直接姿は見せず、不思議な力によって一党の使者たちを介して主人公たちを引き寄せていく。

姫沼綾羽は一党の首領であるが、彼女自身もどうやら白山姫神の化身のようであり、彼女の先に根源的な姫神の存在が示唆されている。

『山海評判記』には 姫神の化身のような人物が何人も登場し、現実の人間なのか霊的な存在なのか定かではなくなる点が魅力である。 姫沼綾羽をモチーフとして、現実と幻想、人間性と霊性が地続きに混ざり合う感覚を描いた。





「訓練士」

6S(41.0×41.0cm)

アクリル絵の具 ミュースグラウンド、パネル、2025年

山形生まれの建築家で妖怪研究でも有名な伊東忠太をテーマとしたグループ展に出品した作品。
伊東忠太の妖怪画と青年期に描かれた人物画に着想を得て、妖怪を引き連れる訓練士のイメージを構想し、常に異形の存在とともにあった忠太の世界観を想像しながら描いた。

「アウロラ」

3F (27.3×22.0cm)

アクリル絵の具 ミューグラウンド、パネル、2026年

ローマ神話における夜明けの神アウロラをモチーフに描いた。アウロラは大気の発光現象オーロラの名 前の由来にもなっており、ギリシャ神話のエーオースと同一視される神。古典絵画では、冠を被り松明を持って飛ぶ姿で描かれることが多く、夜の暗がりや光で照らす暁が神格化された存在である。本作ではアウロラが持つ松明を小さなペン型ライトに変更し、新たな始まりの前に宿る静かな高揚と光の気配を表現することを試みた。





「アツタノオオカミ」

3F (27.3×22.0cm)

アクリル絵の具 ミュースグラウンド、パネル、2026年

日本神話に関わる「熱田大神（アツタノオオカミ）」をモチーフに描いた。

熱田大神は、三種の神器の一つ草薙剣（くさなぎのつるぎ）に宿った天照大神（アマテラスオオミカミ）という不思議な設定の神。

いわば剣そのものが神様として祀られており、熱田大神には多くの災難除けのご利益があると言われる。

熱田大神を手がかりに、人が困難に直面したときにそれを切り開く力の源泉を表現することを試みた。

「花釣り」

3F (27.3×22.0cm)

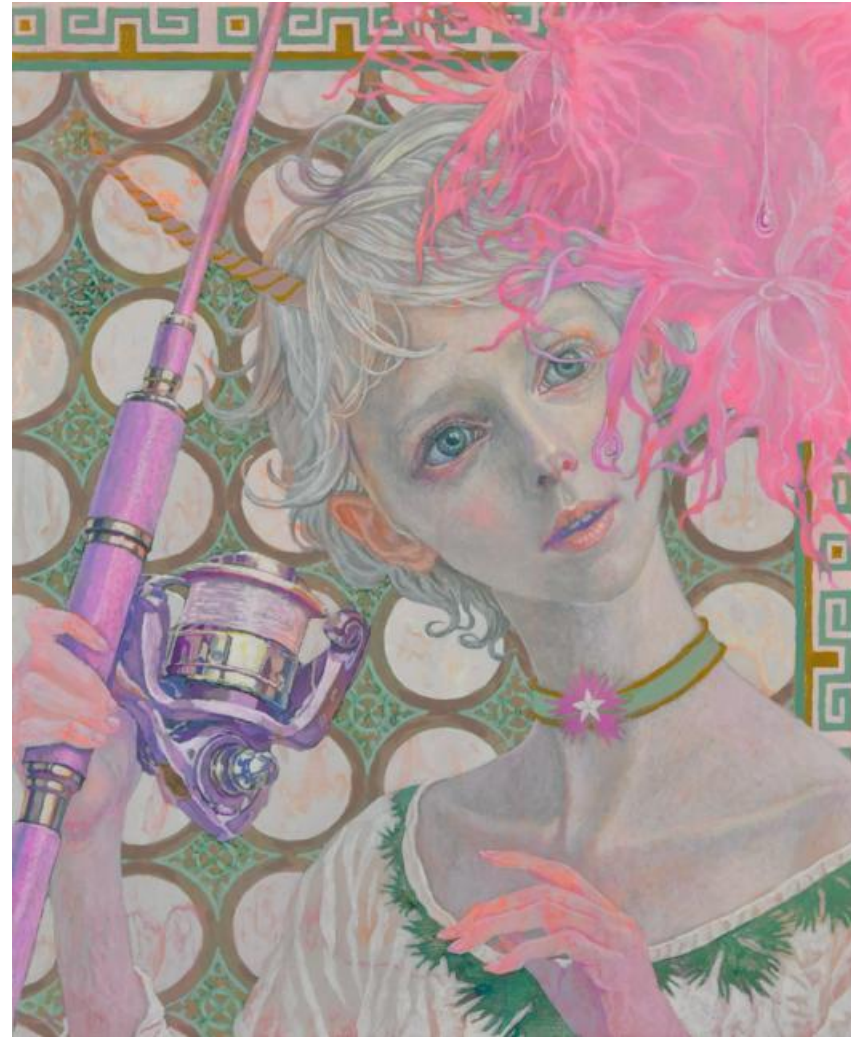
アクリル絵の具 ミューグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『天守物語』を題材として描いた。

『天守物語』は姫路城（白鷺城）の天守閣を舞台に人間と異界の存在の恋を描いた作品。

本作は『天守物語』の冒頭で、異界の存在が天守閣から花を釣る場面に着想を得て制作した。

釣竿は現代のデザインを取り入れ、花を釣るという優美な幻想性と融合させることで、現実と幻想が混ざり合った世界を表現した。





けちょう

「化鳥」

0F (14.0×18.0cm)

アクリル絵の具 ミューグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『化鳥』を着想源として描いた。『化鳥』は、橋のたもとの粗末な小屋で暮らす少年と母親の日常を描いた幻想短編小説。ある日、主人公の少年は川へ落ちて溺れかけたが、誰かに助けられてことなきを得た。助けてくれた人物は誰かと母に尋ねると「翼の生えた美しい姉さん」だという。物語の中で母子は、厳しい現実を生き抜くため、人間をさまざまな獣に見立てたり、天上の存在を想起したりしながら、現実の見方そのものを変容させていく。見立てや想起によって現実と想像を重ね合わせ、新たな世界観を作り上げていく象徴として、翼の生えた姉さんの姿を描いた。

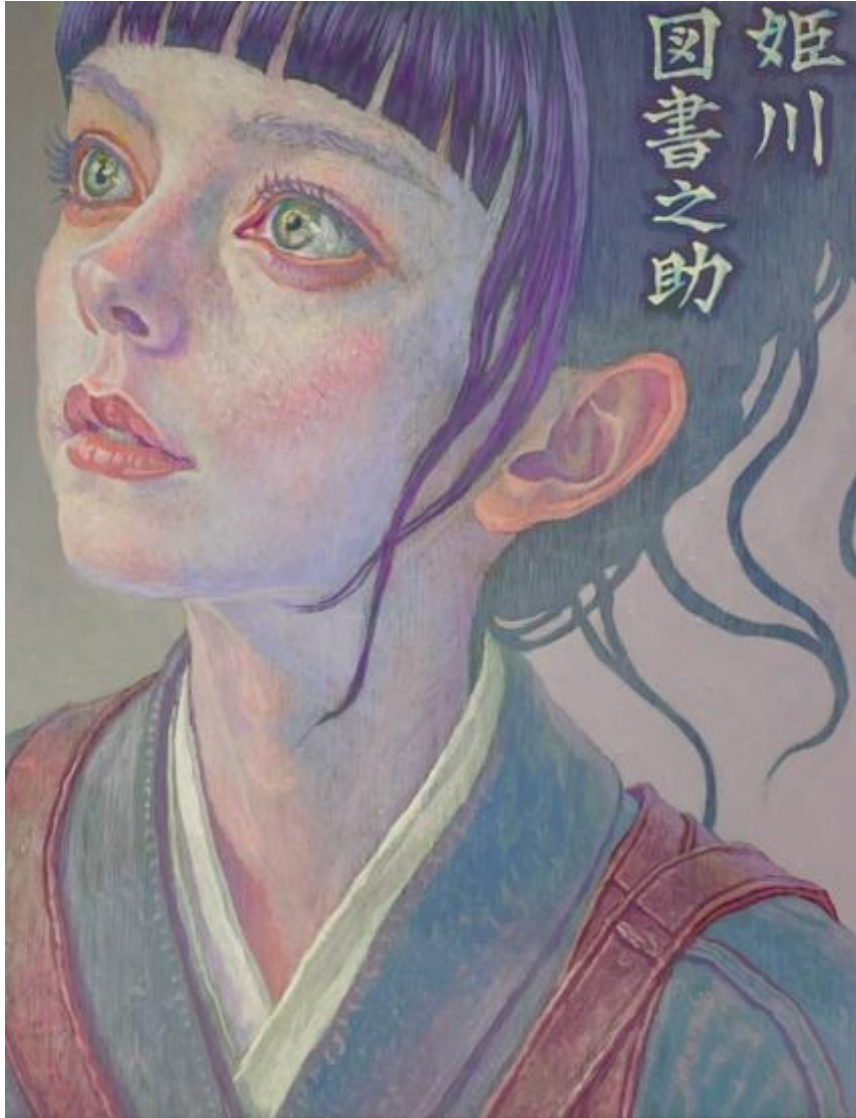
「富姫」

OF (14.0×18.0cm)

アクリル絵の具 ミューグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『天守物語』の主人公である富姫をモチーフに描いた。白鷺城の最上階に棲む異界の姫である富姫は、久しぶりに遊びに来た友の亀姫と煙管を吸いながら遊ぶ。亀姫がお土産に持ってきた城主の生首を 囲んで嬉々としてはしゃぐなど、一同の様子は人間から見るとなんともゾッとするが、それでいてとても妖艶で快活である。人間の常識から逸脱した世界が、現実と地続きにお城の最上階にあるという不思議。そして人間を超越した存在の長である富姫も実は元々は人間であったという。電子タバコを燐らせる富姫の姿を描くことで、鏡花作品に通底する現実と異界の連続性を表現した





ひめかわ ずしょのすけ
「姫川図書之助」

0F (14.0×18.0cm)

アクリル絵の具 ミュースグラウンド、パネル、2026年

泉鏡花『天守物語』に登場する侍である姫川図書之助をモチーフに描いた。

図書之助は藩主の命を受け、逃げた鷹を探して天守閣に入り、そこで出会った異界の富姫に畏れを抱きながら恋に落ちる。天守閣に棲む異界の者たちは、そこに祀られている獅子頭が命の源になっている。

魔物の成敗にやってきた武士たちによって獅子頭の目が傷つけられた時、異界の者たちは全員目が見えなくなったが、同時に図書之助も目が見えなくなった。

図書之助は人間でありながらすでに異界の存在ともなっていたと言える。

視力を失った図書之助を描くことで、現実と異界の境界を跨いだ存在を表現した。



「アウロラ ドローイング」

3F (27.3×22.0cm)、紙、鉛筆、2026年